主婦として公害について考える事

大和田房子

川というものは不思議なものです。よく母なる何々などといわれますが、私は今までその本当の意味がわかりませんでした。しかし最近「土浦の自然を守る会」で、桜川を歩く会や清掃があるたびに感じることは、桜川に対してあまり親しみの気持ちをもっていない自分に気づくことです。それは私が桜川で遊んだことも、川がどんな姿であるかも、まして、どこが浅くてどこが深いかなどの川の事情をぜんぜん知らないことに原因があるようです。

私は江戸崎の生まれなので小野川の岸辺で育ちました。私の子供の頃ーといってもたかだか二十年以内のこと、水面から五メートルもある橋の欄干から飛び込みを競う男の子達さえありました。水の上からメダカやエビの泳ぐのが見えました。しかし、今は遊泳禁止で川底にはゴミがいっぱいです。その上、おどろいたことには、この原稿を書くために江戸崎の大正橋附近を見に行ったら、川が五百メートル位移動させられることになっていることです。今、江戸崎の子供達は夏になると、町に一つある中学校のプールへ先生や父兄の引率で泳ぎに行ったり遠い海へ乗りものに乗って出かけて行くしかありません。これは土浦でも同じでしょう。子供達にとってはプールなどで泳ぐよりは川で泳いだほうがどんなに楽しいかしれません。それなのになぜプールのような人工的なものばかりを大人は与えようとするのでしょう。自分達が子供の時どんな楽しい思いをしたか忘れてしまったのでしょうか。

川をドブのように使い、誰も川の方へ目を向けようとしないのです。これでは今の子供達にとって、ふるさとに流れる川は何を意味するものになってゆくのでしょうか。また、人工的なものを最良のものとする心が公害を助長させる力になっているのではないでしょうか。

人間はどうしてこうも自然に逆って生きて行くのでしょう。人間とは何と強い動物でしょう。一か月以上も冷蔵庫にほうり込んでおいてもびくともしないマヨネーズ真夏でも使いきるまでカビひとつ生えない味噌やしょう油。「こりゃ植物じゃなくて、鉱物かいな」などとやけくそ半分の冗談も言いたくなります。四つも五つも添加物の入ったハムやソーセージは子どもたちの大好物で、プラスチックのハシやおわんで食事をし、合成繊維の着物を着て、カルキのいっぱい入った水道の水をガブガブ